緋弾のアリア～薬物科の武偵～

緋村　梢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～薬物科の武偵～

【Ｎコード】
Ｎ４３５２Ｚ

【作者名】
緋村　梢

【あらすじ】
東京武偵高校に新たに増設された学科＜薬物科（メディシン）＞。
元々、国家試験である薬物取扱者資格を取得できる＜東京薬物専門高校＞という高校があった。
だが、少子化による生徒減少により経営が困難となり、国立である武偵高と統合することとなった。
薬専高に通っていた＜姫神（ひめがみ）　薫（かおる）＞（１７）もまた例外ではない。
薫の所得済みの資格は危険物取扱全種、薬剤師、有機溶剤作業主任者、麻薬取扱者、毒物劇物取扱責任者等を所有している。

というか、学校が強制で取らせるのだが・・・・。
そんな普通の高校生活からかなりかけ離れた薫は、これからもっと普通の高校生からかけ離れるとは、夢にも思っていなかった・・・・・。

＜作者メッセージ＞
こんにちは、私は国語力・文章力などの小説に必要な要素が欠けています。
ですが、私は自分のできる限りの力を出し切って書きたいと思うので、目を瞑ってください。

1弾-Prologue-

とある日、俺は引越し屋のトラックに揺られながら、眠っていた。

今年から俺は東京武偵高校に新設された学科・・・＜薬物科（メディシン）＞に所属することになった。

そうなった理由は、少子化により　全校生徒数が８００人から一気に２９０人に減ったからだ。

それもそのはず、今年入る予定の一年生は、１８人で、今年卒業したのは、５００人、在校生はたった２９０・・・。

それに新入生を足しても、３０８人・・・。

少なすぎる・・・・。

それに、今在校している生徒のには海外の研究機関に行く者もいる。

その為、大体在校生は２００人居るかいないか・・・・。

３年は１２０人、２年は俺を含め、６２人、１年は１８人となった。

その為、経済的な余裕がなくなって、廃校となった・・・。

だが、武偵局の計らいで、武偵高と統合するとなった・・・。

さすが、校長の人脈・・・・。

その人脈を生徒集めには役立てんのかね・・・・。

俺はそう考えていた。

すると、トラックは停まった。

「着いたぞ、ガキ」

「見りゃわかるって・・・・」

俺はそう呟いて、トラックから降りた。

しかし・・・・、薬専校の寮よりきれいだな・・・・。

「おら！さっさと運べよ！」

ちまちまうるせい奴だな・・・。

「分かってるって・・・・」

俺は渋々、荷物を運ぶ。

運ぶと言っても、アタッシュケース×８と実験用具セット、白衣と私服だ。

そんなに数は無いが、アタッシュケースは一つ１０ｋｇある。

俺はそんなアタッシュケースを４つ同時に持って、今日から住まう部屋に運んだ。

部屋は遠山っていう人の隣だ。

すべての荷物を運び終え、運送業の男性を見送りに、外に出た。

「んじゃあ、達者で暮らせよ」

「言われなくても分かってますって・・・」

「しかしまあ・・・、なんでお前は行かなかったんだ？」

「何にだよ？」

「寮だよ、寮。折角、校長が学校の土地を売り払って、買ってくれたんだからよ。ちったあ校長の恩も着ろよな」

「んなことといったら、校長に迷惑掛けっ放しになんだろ・・・」

「そうだな・・・・」

「また何かあったら連絡するよ」

俺がそういうと、男性は「おう」と言って去って行った。

さてと、俺も部屋の片づけするかな・・・。

俺はそう考え、部屋に戻った。

部屋に戻り、俺はアタッシュケースをクローゼットに入れた。

そして、ある程度、部屋を片付けたあと、チャイムが鳴った。

俺は時計を見た。

時刻はＰＭ１：２９を回っていた。

確か武偵高説明会はＰＭ２：３０からであったような気がする。

てことは、恐らく・・・・

俺はそう考えつつ、玄関を開けた。

そこには、セーラー姿の少女が居た。

「よう、春風。何の用だ？」

「おっつ～。今日は薫が来る日って聞いてたから、来てみたの。そしてついでに、いっしょに武偵高に行かない？」

「別にいいぞ。すぐ着替えるから待ってろ」

俺はそう言い残し、リビングで着替えを済ませ、学ランを着る。

東京薬物専門学校は学ランである。

女子はセーラー服。

まあ、これを着るのは今日が最後だろう。

説明会の時に制服の採寸もするって言ってるしな・・・。

そして、俺は玄関に出て、春風と共に武偵高に向かった。

武偵高に到着し、体育館に入った。

すでにほとんどの生徒が集まっていた。

俺は自分の学年のところの椅子に座った。

周りの奴はみんな顔見知りだ。

といっても、当たり前なことなのだが・・・・。

そして、説明が始まった。

この武偵高では、＜薬物科（メディシン）＞は、衛生学部になるらしい。

薬物高では、全員が薬剤師の資格を取得しているため、納得できるのだが、劇毒物を扱う奴は少し頭を捻るだろう。

まあ、俺はどうでもいいんだが・・・・・。

その後、制服の採寸をして、設備説明を受けた。

その途中・・・・・・・迷った・・・・・・。

俺と春風、それに俺の親友である、倉木雪弥（くらきゆきや）（17）、春風の親友である、姫川（ひめがわ）　愛美（あゆみ）（17）・・・・・・。

「なんで迷ったんだ？薫」

「なんでだろうな・・・・、雪弥」

「そんなの決まってるじゃない・・・・・」

「これはもちろん・・・・」

「「「雪弥が興味本位で廻り過ぎ！！」」」

俺と春風、愛美はハモった。

「全部俺のせいかよ！！！」

「「「それしかねえだろ！」」」

俺達がそういうと、雪弥はしょぼんとした。

「さてと、これからどうするの？薫」

「感でいくしかねえだろ・・・・」

俺は適当に、歩く。

すると、クロロベンゼンの香りがした。

恐らく、薬物科(メディシン)の学科塔が近いのだろう。

俺はそう考え、香りを辿った・・・・・。

1弾 - Prologue -（後書き）

姫神（ひめがみ）　薫（かおる）（17）
髪：漆黒のナチュラルスイングショート
眼色：ダークブルー
身長：172cm
所属：薬物科（メディシン）2年

春風（はるかぜ）　詩穂（しほ）（17）
髪：漆黒のロングヘア
眼色；エメラルドグリーン
身長・155cm　B；B70
所属：薬物科（メディシン）

倉木（くらき）　雪弥（ゆきや）（17）
髪型：濃い茶色のマッシュウルフカット
眼色：ダークグリーン
身長：170cm
所属：薬物科（メディシン）

姫川（ひめかわ）　愛美（あゆみ）（17）
髪型：黒色のセミロングのストレート
眼色：ダークブルー
身長；153cm　B：A60
所属：薬物科（メディシン）

2弾-Second Prologue-

香りを辿ると、［KEEP OUT］［HAZARD AREA］と書かれたテープで仕切られている建物に到着した。

その建物の付近には防護服を着た人が10名ほど居た。

入口のあたりに、有毒を記す絵が描かれたトラックが一台居た。

そのトラックの荷台から、防護服を着て、フォークリフトを運転している人が、何かを運び出した。

「ありゃなんだ？」

「薬物科なら自分で考えろ」

俺は雪弥が聞いてきたため、そう返す。

目を凝らして、トラックに書かれた文字を見た。

そこには＜トリクロルエチレン＞と書かれていた。

「・・・・さっさとここから離れるぞ」

俺は振り返り、その場を離れた

「お、おい！」

雪弥は慌ててついてきた。

もちろん、春風と愛美もついてくる。

「一体どうしたの？薫」

「お前も自分で考えろ」

「ケチくさいな～、教えてよ～」

俺は立ち止り、振り向く。

「仕方ねえな・・・。ありゃトリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

俺がそういうと、３人は驚いた表情をする。

「おいおい・・・なんでそんなもんがあんだよ・・・？」

「俺が知るか。恐らく、劇毒物取扱関係だろ。それより、早く合流しないと・・・」

俺は携帯を取り出す。

すると、３件ほど着信があった。

「風宮からだ」

「風宮から？なんでお前が風宮の携番知ってんだよ？」

「別にいいだろ。それより、電話してみないとな・・・」

俺は風宮に電話をかける。

『お！やっと繋がった。お前らどこに居んだよ？』

「悪い、恐らく薬物科塔（メディシン）から西に５００ｍのところだと思う」

『もう薬物科塔（メディシン）に行ったのか！？』

「ああ。お前らも行っただろ？」

『それがよ、今は立ち入り禁止らしいんだ。なんか劇薬を納庫してるらしくてな』

「それなら見たぞ」

『本当か！？で、薬品はなんだ？』

「トリクロルエチレンだ。それも高濃度のな」

『おいおい・・・・マジかよ・・・。お前らよくそんなとこ行けたな・・・。もし俺がお前らだったら逃げ出すっての・・・』

「俺達も逃げてきたところなんだよ。高濃度のトリクロルエチレンっつったら、毒分類だからな。それよりお前らどこいんだよ？そっちと合流すっからよ」

『ああ、ここは確か・・・・・強襲科（アサルト）実習場・・・・。次は救護科（アンビュラス）の学

科塔に行く予定だ』

「分かった。なら俺達は救護科(アンビュラス)の学科塔に直接向かう。案内人には伝えといてくれ」

『了解。んじゃあな』

そう言って、風宮は通話を切った。

「さてと・・・」

俺はポケットから地図を取り出し、開く.

今俺達が居るところから救護科(アンビュラス)の学科塔まではそれほど離れては居ない。

「んじゃあ行くか」

「じゃあ俺が先頭を・・・」

雪弥がそういうと、空気が重くなった。

「・・・・やっぱ薫が先頭でしょ」

「そうだね」

「おい・・・・なんで俺じゃダメなんだよ・・・?」

「デジャブを見たからよ」

春風がそういうと、愛美が相槌を打った。

「んなことどうでもいいからさっさとあいつらと合流するぞ」

俺はそう言って、歩き始めた。

数分後、俺達は救護科(アンビュラス)学科塔に到着した。

「まだあいつ等は来てないっか・・・」

「まああいつらが先に来れるって保証はねえし。それに、あいつらは強襲科(アサルト)の学科塔から

来るって言ってたからもう少しかかるだろう」

「そんなに遠いのか？」

「約０．９ｋｍだ。まあ気長に待とうや」

俺はそう言って、近くのベンチに腰掛け、上を見る。

木陰が涼しいな～。

すると、隣に春風が座った。

「薫、どうして寮に来なかったの？」

「どうしてって・・・・」

「そうだぞ。お前が居ねえから春風がさみ・・・・」
雪弥が何か言おうとした瞬間、春風がボディーブローを食らわした。
「お、おい・・・・」
「何でもないって、ねえ？ゆ・き・や！」
そう言っている春風・・・怖ェ・・・・。
「あ・・・ああ・・・」
雪弥は苦しそうに腹を押さえて言う。
「そ、そうか。発言には気をつけろよ」
「そうする・・・」
「で、なんで校長の用意してくれたマンションに入らなかったの？」
「それは・・・、校長に迷惑をかけたくないからで・・・・」
なんだか苦しい逃げ方だな・・・。
「ふ～ん・・・。でも、薫のために一か所だけ部屋が空いてるんだけど・・・・」
「ああ、あの部屋は後輩にでも使わせてやってくれ。俺はあそこに入る気は始めからないからな」

「わかった。でももし、来たくなったら、事前連絡してね。そん時は部屋のあて、探すから」

「そん時は頼むな」

そんな話をしていると、風宮達がやっと来た。

その後、いろいろな説明を聞いて、寮に戻った・・・・・。

寮に帰り、俺は学ランを脱いで、段ボールに畳んで直した。

「もう・・・使わないからな・・・・」

俺はそう呟いて、私服に着替え、制服とズボンを洗濯機にかけ、寝室のベッドに倒れた。

武偵高の制服は明日には届くらしいしな・・・。

あと、銃刀所持が校則で決まっていて、俺は無難にベレッタＭ８００という銃とＷ２鋼という素材を使ったバタフライナイフを頼んだ。

てか、薬物を扱ううえで、火気は厳禁だ。

だから、銃には恐らく弾は込めない。

でも、そしたら意味ないか・・・・。

俺はそう思いつつ、眠りに就いた・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4352z/

緋弾のアリア～薬物科の武偵～

2011年12月19日00時52分発行